



假字本末
上卷之上

ホ 2
4231
1



著述目錄概言を記すれりしに
 まつりては板のあつたを
 信近の志のあつたを
 ねとん

嘉永三年三月

長澤伴旌

假字本末上卷之上

草假字

伴信友 稿

上代に文字と云ふもの、無の事ハ大同三年に
 齋部廣成宿祢の撰むて上れる古語拾遺の序に蓋聞
 上古之世未有文字貴賤老少口口相傳前言往行存而
 不忘云云と見えり今古典に據りて推替ふるにも
 真に然る事なる法し大江匡房の菅崎宮記に尋其
 書文字代結繩之政即創於此朝云と朝野群載に見
 る勸文に上古之事出口傳とも有り然るに眞治三年
 と云へ部正通宿祢の著せる神代口決の凡例
 神道自不異二教者天地道理也と説ひては凡例

○假字本末上卷之上

一

物名也。字名義云云。ハ字を奈と云ふ由ハ何れ
字とあるを古訓ニヒナリと説けるなり。天武紀ニ新
ハ加利奈と云ふべきを言便ハ加無奈と云ふ又加奈
とも云都下於以義為真字。漢字もて書ける文ハ字
義を主と音為假字而已。漢字音を假借て皇國言の聲
ふりと云云と説ち然らざるがおよし。那布イイイ字義よ
より訓をさざめてとむるなりてを。神名人名地
名。ちと漢名知られぬ物名を能類タケヒハ。その言能さま
にたりて。便よく音訓をとり交へたりても書記した
りしある法し。かくて漸漢字を用ゐるゝと何をもせ
て。祝詞詔詞あどの如た。言辭コトバを書とゝのふるにハ字

數の所まりふ多く那りて煩はしけ然ハ。音訓を交へ
書た。或ハ訓をとりて借字とし。或ハ字義によりて。言
辭コトバ當那アテやしてても書多りなむ。古事記の序ハ其書此
二已因訓述者詞不速心全ハ以音連者事趣更長是ハ以今
或一句之中交用音訓。或一事之内全ハ以訓録と云をれ
らして推考ふ法し。然るも歌を殊ハ歌ふものあれ
ば一言もとみ多かへど。音假字もて書連ぬる那ら
むしてそありなむ。お然ら那考ハ。古のおもむたを考
へ。古事記日本紀。そのほり古文此記シレされさま那どを
考合せと論へる那り。さて歌みすたとる人あどの尋
常ツネたのがとみ多る。ちと古今イシイマの人々の書カキとむと。

中むうの人の詩作此類と編むる書
元進士花艶谷選と標て乾坤氣形支體飲食など部類
して其事物の皇國言を漢字音をもと寫し記し其下
ふ漢名を當て注せる找抄載たる中に

都嗜月。兔記同。土宜同。屠き同。つき同。

屠其同。土期同。津幾同。

かく書り。あの國花合記集といへるハ花艶谷が選べ
花集と稱へハ混らるおとくたゆれど此本書を國
尋問ふ傍しハいづきよも件の文を花艶谷が選べる書
の文著し。都て二百餘言載たる中。多ぐ件の二字を
草假字に書るも艶谷が本書の傳へたるも

おろく。其をあの國人に皇國人に逢て言語を問て自
ら書も記し。まゝ皇國人の書て與へたるおろく。寫と
ど免ある中。草假字に書たるも有りたるを。さ
からとり。くに交へ記せるものあるは。津幾と書
皇國の訓假字なれば。あまも。この人の書て見せ
たるま。寫記せるもの。おろく。おろく。ひ合はべ
件。草假字選べる艶谷を。貞元進士といふ。その貞元
を。唐の徳宗が世の年號。その元年ハ。皇朝に延暦
四年に當れり。空海。最澄等ハ。延暦廿三年。かの國に貞
元二十年。彼國に渡り。これ。二僧等。問。注せる
も有べく。又既く皇國言を問。聞て記し。かける書より。

取て載たるも亦も有るはし。いつきよも延暦の頃。は
やく草假字をも用むたり。證とほべし。上論へる
ふ後のよか。所きど。古き文書どもを見らる。其道々
定まりて常。用ふる字をきき。例り。見ゆるが
其本字のあらきぬ。中より。今世の書。用ふるが
すく。り。か。近。其。中。今。世。の。書。用。ふる。が
ち。と。け。が。近。其。中。今。世。の。書。用。ふる。が
つ。ろ。ひ。行。か。の。消。息。ふ。ら。の。い。ほ。ひ。殊。多。り。事。を。上
世。の。書。讀。み。幸。甚。を。思。ひ。や。る。は。漢。國。の。書。も。よ
り。思。合。す。は。し。相。う。つ。ろ。へ。る。お。も。む。た。ハ。あ。こ。下
は。も。い。ふ。べ。し。相。う。つ。ろ。へ。る。お。も。む。た。ハ。あ。こ。下
たるも。書く人のあ。ろ。く。にものせるあら。其用ふ
る假字も。とり。く。定。ま。ら。げ。又。その。字。體。も。か。の

流うら筆の勢イキホふまりせなりて。うちよむに煩を
しく。は。と。ま。た。ら。を。し。き。う。こ。も。有。ぬ。は。き。を。い。ち。ご。下
ざ。ま。の。もの。に。及。ぶ。ば。り。あ。ま。ぬ。く。文。字。は。行。を。さ
る。世。の。り。の。た。む。女。童。の。ど。ハ。さ。ら。よ。く。書。讀。み。字。書。く
道。不。疎。き。下。さ。ま。れ。もの。あ。ど。た。う。ち。は。り。せ。て。用。ふ。は
た。る。を。あ。ら。ざ。ま。れ。む。を。空。海。僧。都。その。草。體。の。假。字。よ
り。と。つ。き。て。さ。ら。に。目。安。く。な。ご。ら。先。書。て。四。十。七。音。の
字。體。を。製。り。定。め。り。已。が。尊。べ。る。佛。法。の。意。を。演。て。い。ろ
は。に。ほ。へ。ど。云。々。の。讚。歌。よ。作。り。と。く。へ。書。つ。けて。文
字。あ。ら。ぬ。者。と。も。ふ。其。歌。を。その。假。字。ふ。ゆ。く。讀。習。は

一先書習は、先たるものよあむありなる。さく其空
海にいろは假字作まる證を凌雲集に載たる。此書序文の首
濃守臣小野朝臣岑守上とあり從五位下内膳正仲雄
王の謁海上人と題る詩句は。道者良雖衆勝會不易遇
寢興思馬鳴。俯仰謁龍樹。一得遭吾師。歸貧□寓住。飛流
馴道眼。動殖潤慈澍。字母弘三乘。真言演四句。云云。と見
えたり。海上人と云。件の句中にいへる。字母弘三乘
真言演四句と云。空海にいろは歌製まる事を讚むる
まて。是そこの假字製れる事也。明ある證ありなる。倭
片假字反切義解の序は。弘仁天長年中。弘法大師釋空

海造四十七字。伊呂波四十五字。以便宜于女童。其體則草
書也。と見え行阿定家卿と同時の人ありの假字遣の序も。権者
の製作を以て。真名に極草の字を伊呂波に縮免なり
て云々と云へり。又河海抄源氏物語梅枝卷の條に。江談云。天仁
二年八月日。向小一條亭言談之次。問曰。假字手本者何
時始起乎。又何人所作哉。答云。弘法大師御作云々。件事
無所見。但大女御御自筆假字法華經供養之時。被行御
八講。講師南北英才相遊。為導師。高名清範慶祚等之輩。
各振富樓那之辨才。之後。源信僧都又勤此事。説云。日本
國者誠雖為如來之金言。唯以假字可奉書也。弘法大師

傳習諸真言梵字悉曇等密法之後寄四教法文作イ口
 ハニホヘド讚給以來一切法文聖經史書經典不離此
 讚文字イ口ハニホヘド字色ハ句ヘドト云心也。不説他
 事只以此一事令講而人々皆驚耳之由所傳聞也。古人
 日記中在此事云々。云々。源信ハ寛仁元年。六十一。卒りし。又問云。然者件弘法大師御時以徃無假名欵。日
 本紀中假名之日本紀在之由慮外令見答云。此事尤理
 也。雖然只付倭言合之書也。イ口ハニ於テ尚彼時始ル
 欵。先哲可尋也。件の文今世遺在江談ハ缺と云。二書の異本どもも二書互ニ脱字誤字を起す。又其
 下全載きり。二書合せしめて引り。其

文中に假名之日本紀在之由慮外令見とハいろハ假
 名ふり書たる日本紀ハありて。加る書ハ有まハ假
 やくより作り。イロハ假名ハありて。加る書ハ有まハ假
 大師此より作り。イロハ假名ハありて。加る書ハ有まハ假
 日本紀の由。於答云。倭言合之書也。漢文を以てハ。此
 て假名よ。て書き。るもの。假字。日本紀。三。十。卷。首。に。日
 尾崎雅嘉。群書一覽。の。假。字。本。紀。三。十。卷。首。に。日
 本書紀。と。題。せ。り。全。文。を。假。字。本。紀。三。十。卷。首。に。日
 寄合書。和訓。を。つけ。り。或。人。の。本。紀。三。十。卷。首。に。日
 け。と。和。訓。を。つけ。り。或。人。の。本。紀。三。十。卷。首。に。日
 の。書。體。を。あ。ら。わ。す。る。多。く。一。本。を。得。る。事。を。假。名。所
 之。假。名。本。紀。と。云。ふ。同。書。の。假。名。所。得。る。事。を。假。名。所
 り。此。本。紀。と。云。ふ。同。書。の。假。名。所。得。る。事。を。假。名。所
 る。書。と。見。え。私。記。の。但。し。其。真。假。字。の。殿。下。御。書。也。と。注。し
 二。三。思。ひ。ま。が。ふ。ほ。ら。ら。り。引。ま。す。頭。阿。法。師。の。高。野。日

○假字本末上卷之上

只

記に。高野山より上りて。綱元入海象高野寺の縁ある事どもものごとく中よ。大師此山をたひらうせむひて。堂たささせむふに。木能道の多くみ。文字能事を知らぬむ志るし何むほべき料料字一本もたひらうとく。いろはの四十八字を。たへさせむひらうより。末の世の人能多けけりもたひらぬとたあえ侍りらうむ。さらばとたひらう。いろはを冠おたきて。四十八首をつり出し影前よそあふ。と云ひて歌あり。竈イハテ後能歌お京見ぬもよく知る人もとたふれむ。みあむらひ由くちかひたひらうとく。と云えらう。但し海象がいろはの四十

八字と云へる也。後よ京字を加へ書くならひとたきる上をもて談れるに。頭阿もそれよりて。もせより空海のものせるも何らば。後人此書加へ書るがたひらひとたりとましものたひ。此事ハ。た布下空海の高野山よ寺建立タ創するハ。弘仁十年の事たる由。書どもみ見えらるに。かの倭片假字反切義解此序よ。弘仁天長年中よ。造四十七字。伊呂波。と云へるも合カへり。若國遠敷郡野代村。妙樂寺よ。延暦十六年よ。空海の建たり。と云ふ金堂一字今も存りて。空海能自書る棟た在り。まご其寺よて書たると云ふ大般若經全部と。其時用ひたりと云へる硯も今も在り。過お理ふと。四年の頃。かの金堂いとく破壊たり。なるを修り。ふと。四年とも。柱の柵接れど取解ける。お。た。べ。く。ハ。い。ろ。は。字

○假字本末上卷之上

於どもや符合す邊き處に。東西南北の字と。方圓三角
なむ。繫をものたり。む。此寺作り。工。等。ハ。いろ
はを。バ。知らざりつる。よ。お。そ。と。其。修理。不。預。ま。る。工。の
語り。と。其。今。か。も。へ。む。高。野。寺。ハ。あ。れ。より。後。又。建。と
と。云。へ。る。説。と。い。ろ。は。を。作。り。て。教。へ。たり。さ。て。か。の。仲。雄
王。孫。詩。句。ハ。字。母。弘。三。乘。と。云。へ。る。字。母。と。ハ。い。ろ。は。に
ほ。へ。と。云。々。孫。四。十。七。字。形。り。三。乘。ハ。佛。教。の。人。に。聲。聞
縁。覺。菩。薩。と。以。買。る。三。等。有。る。事。を。云。へ。り。こ。ゝ。ま。て。ハ
人。間。と。い。ふ。意。なる。法。一。真。言。演。四。句。と。以。買。る。真。言。と
を。龍。樹。釋。論。ハ。謂。之。秘。密。号。と。大。日。經。疏。ハ。梵。云。漫。怛
羅。則。是。真。語。如。語。不。妄。不。異。之。音。也。形。と。説。ひ。ま。と。陀。羅
尼。神。咒。形。と。云。ふ。もの。に。も。通。を。し。て。稱。へ。る。を。件。の。詩

句もを。いろはす形をち真言ふと。尊記讚歌形る由の
意に稱へり。と記あ也。梁高僧傳ハ。天竺方俗。凡是歌
詠。法言。皆稱。為。明。至。於。此。土。詠
為。梵。音。と。も。見。え。と。り。演四句とは。涅槃經ハ。諸行無
常。是生滅法。生滅々已。寂滅為樂。とある四句。孫意を真
言ハ。演たる由を讚ふるなり。形ハ。此四句を演する意
ハ。上も引出たる江談に。假字法華經供養此時の源
信の説を擧て。日本國者誠雖為。如來金言。唯以假字可
奉書也。弘法大師傳。習諸真言梵字悉曇等密法。之後。寄
四教法文。經の四句をさしてハ。かの涅槃
ホヘド。讚給。以來一切法文云々。不離此讚文字。イロハ

ニホヘド字。色ハ句ヘド云心也。と記せるをもて心得
後し。さて又舊説いろはの讚歌其詞。彼涅槃經の四
句を當て解り。

色は艶へど。散ぬるを。諸行無常之義我世誰ぞ。常在らむ。是
減法有為の奥山。今日越えて。生滅之義浅死夢見し。醉生

今按ふ此讚歌の句調。七言も起。五言と句を互に
あつて。五言に結。八句四十七言なるハ。僧家も和讚
とて唱ふ歌と。句調風體もはら同じ。然るハ佛經も梵
讚とて。天竺歌のあるを。漢國もておのが國言をも

て其句調も叶へ作りて。其意を演るるを漢讚といへ
り。さてその梵讚の中も。七言五言八句四十七言なる
體のありて。其も叶へく作まる漢讚其あるをもて推
し考ふるに。空海その句調其梵讚漢讚のあるも擬ひ
て。更ふ皇國言もて此讚を作して和讚といふるを。後
ふ其句調風體もよめる歌を。うち後りせり。和讚と稱
ふ事とありしものある事。對照して知る後し。梵讚
漢讚和讚の事ども。其證を擧て論へる説。あまかくて
ど。あまむくしがとし。別々下にいふべし。かくて
空海その梵讚其四十七言なる體もよりて。字母の四
十七音を分りて。その句調とし。いをもる四句其法文

此義をとりみ整へて一首と作し。又さらばその假字を
製り定めて。己の高野の寺建る時。工匠等不教へたる
を事はし先不^ク。字知らぬ民ども。女童あどふも口遊
ま^ク。先唱を^クめて。佛法の意をもほのり不知らし先
は^ク。其假字を書習を^クて。遂に世に行はるは^クも
の^クたりりるおもひあねの深き事。以て空たぐむ^クき
所^ク為ふこそありけき。然るに空海は作れる天地麗
氣記と云書ふ。天兒屋命所持金剛寶杵中調色葉文
為^ク淨事。如元令成給伏乞矣。よ^ク。天御量柱。天地開闢色
葉法界。法身心王。大舅茶羅。一心无作。本妙藏。天地和合。

蓮華金剛。无始无終。從本垂跡也。といふり。あを別し。又
色葉は説を作りて。例の神道も附會せるものなり。
大和の當麻寺に藏る。空海は真筆のいろはは首不寶
字を大ひひきはちて。篆體不書たるも。以てゆる天
兒屋命所持金剛寶杵中云々。此意を用て書とるなり。
さく件の色葉文。色葉法界の説を。か^ク四教法文は意
るものせるふハ似もつらば。拙劣しともは^ク。さ
るハ此色葉は^クめ。偽造れる強説^クなり。僧文
和字大觀抄の説。空海は^クは^クの詞を隠して。七字
ば^クは^ク別ち讀ま^ク。先^クは^クふ^クへ^クの唇音^クなり。事
知らし^クは^ク歌^クを^クへ^クは^クひ^クふ^クへ^クの^クを^クは^クる^クに^ク各^ク二^ク字
通ひ^クは^ク音^クと^クなる^ク事^クを^ク教^クへ^クは^クひ^クふ^クへ^クの^クを^クは^クる^クに^ク各^ク二^ク字

所りて其輕重の音辨別又此歌を知らぬの上を論ずるは、
 妙の作なり。其の輕重の音辨別又此歌を知らぬの上を論ずるは、
 むる花もみぢの散るは言なけり。何の色を論ずるは、
 へる詞もよむ事ハ調ひるもあまきどがむきまふらほ
 も作れ連ぬむす難むるあまきどがむきまふらほ
 うざりバ假名起當在何世哉と問へら答ふし、
 日本紀云我朝應天御宇也。於和字者其起可師、
 漢代教云々。伊呂波法大師也。之申傳、
 神代教云々。伊呂波法大師也。之申傳、
 昔傳來和字部兼成伊呂波法大師也。之申傳、
 此書引記中ト師方宿禰之師也。之申傳、
 を引記中ト師方宿禰之師也。之申傳、
 那替へざる書謾云云。考る此は假字體、
 傳まると奥書でふ記せり。考る此は假字體、
 安の歌ハ五言の起るも、
 歌和讚那ハ五言の起るも、

ハ上古より一首も何るあらし然る今様取どい
 ふ類の歌ハ一首も何るあらし然る今様取どい
 りて五言に結むる今様取どい
 今様の五言に結むる今様取どい
 句調のくもハ何れもよむる今様取どい
 ひの調のくもハ何れもよむる今様取どい

○かく考記しれたる後、此は一年保十高野寺に學

靈法師著せる。弘法大師年譜を見る。此書取べ
 古書どもを引て、懇切なく、自他の或記云、弘仁十年
 六月一日、大塔心柱造始、南峯云々。同廿八日、心柱曳
 塔上時、大師令授與大工給印明。中其夕方此真言
 令忘失。仍實惠大工奉問之處、實惠力ナノツキヤウ

○假字本末上卷之上
 ○三

アヤシ三給テ。高祖御前詣奉問。下お高野見問秘
録曰。弘仁十年己亥六月朔日。大塔心柱造始。南虎峰
同廿八日曳之於檀上。柚大工一。大法師二。大法師如
此之役人等各十六人也。且云結縁料各々十六人授
真言。同夕方此真言各々忘失。仍實惠一。大二。大共
奉問之所。實惠假名ノツキ様ヲ怪ミテ。高祖御前詣
而明奉問云云。と引載せしり。二書ともふ同時此事
の傳説なるを。後ふ閔傳へきる僧此二方ふ書記せ
るも然り。ともにむかし俗文にて。通えがと
とあるあきと。相うよと。大意を推し考ふるに。

あの時大師此大工等ふ。印明ま。真言を授。といへ
るハ。かの高野日記ふ。空海高野山を起りひらきて。
堂を建る時。木此道のふくみ。いろはの字を教へ
しる由。えきる時。此事ふ當りて。うの倭片假字反
仁天長年中。造四十七字伊呂波。切義解此序ふ弘
と云へる。天長此年。おろも合へり。其真言と云へる
ハ。仲雄王の詩ふ。字母弘三乘。真言演四句。と称へら
れしる。ふ相合カ+む。いろはの事と。おろも。但し
假名ノツキ様云々。と云へる詞。此きこえ。うときを。
つら。考ふるに。山槐記ふ。今日訪三蔵院法印。次
伊呂波。と記さ。此しる次。と同語。假名のおと次。

様といふことなるべし。其を次といふる由も。空海
所書る伊呂波假字の摹本どもを見るふ。尋常のお
とく。七字六行。五字一行ふ書終ざるをねもふ。大
工どもふも。其定ふいろはを書て。歌ひさまをも教
授とりつるを。大工忘れと云ま。さらに實惠ふ問
ふるふ。實惠所假字をむ。ひろを讀ふをよと云ざる
免まど。歌詞なりとい意流うぐ。何事とも云み辨へ
ぐ。此を怪えて。所讀次さまを師ふ問する由那
る。此し。所真言も。梵漢など所あらむ。ハ。實惠
ほどの法師が。さむりのりの。假名附を。師ふ問

ふむ。うま怪しむべき。あらは。又上ふ論へるおと
く。所所み賤し。大工等がよむ。はりなる目や
すき假字の。ある。流くも。あらされ。ハ。以。けまよして
も。梵漢所真言の文字ふ。假字附して授けらむ。ハ
おもえれず。さて又りの次伊呂波と記さきたるを。
當時も。ねべ。ハ。今の世所おとく。七字づ。ふよと
きり来れる中ふ。真言宗ふ。ハ。讚歌ふ唱ふる聲明
の。ありて。其を唱ふるを伊呂波を次ぐと云て。法
文の義ふ叶へて教ふる。ねらひありたるを。其を授
りふ法印が許ふものし。ぬへる由ある。流し。さてか

く考きるハ。かの引くるニ書カ文とも云。云々奉問
と云ふまでを引載せて。其下文を畧々るハ。答言を
む記さで。他事不_レかよ_レる_レ故_レ形_レる_レより。又かの麗
氣記不_レ。天兒屋命の金剛寶杵の色葉文_ハ。おと天御量
柱ハ。色葉法界。法身心王の大曼荼羅。曼荼羅す_レ形_レを_レち
真言なり既_レに_レい
へる_レお_レ。形ど_レ以_レ尋_レる_レ類_レ形_レ説_レなる_レ法_レく_レ推_レ考_レて。かく_レを
論_レら_レへる_レ形_レり。さ_レ形_レど_レ以_レお_レご_レ其_レ本_レ書_レを_レ見_レざ_レま_レハ。お
したて_レハ。以_レむ_レぐ_レと_レ々_レ形_レど。さ_レは_レが_レみ_レす_レて_レか_レと_レく
ぞ。追_レ継_レて_レあ_レに_レ書_レ加_レへ_レ川_レな_レ本_レ書_レを_レと_レ言_レた_レる_レ
法_レ。

かくて世不_レ空海形_レ書_レする_レいろは假字形_レ寫_レ形_レり_レと云
へるものお_レ形_レれ_レ何_レり。今の世不_レ普_レく_レ世_レ不_レ行_レたる_レ
と。字體_ハい_レと_レく_レ異_レあら_レぬ_レが。い_レづ_レも_レた_レが_レ寫_レ傳_レへ_レたる_レ
のみ_レり。其もと_レ形_レ真_レ蹟_レの_レ在_レ所_レを_レ詳_レ形_レら_レは。其中不_レ大
和國當麻寺不_レ蔵_レり_レと_レ以_レへ_レると。出雲國神門郡塩屋の
神門寺不_レ蔵_レり_レとい_レへ_レる_レぞ。並_レ不_レ同_レ一_レ字_レ體_レ不_レぞ。正_レに_レ形_レ
もの形_レる_レ法_レき。さ_レ其_レ當_レ麻_レ寺_レなる_レハ。空海形_レ朱_レ印_レを_レ捺_レ
せり。前_レ不_レ篆_レ體_レみ_レて。寶_レ字_レを_レ大_レき_レく_レ書_レと_レり。お_レの_レ絹_レ不_レ書_レ
字_レ形_レ車_レハ。上_レ不_レ天_レ地_レ麗_レ氣_レ記_レを_レ引_レて_レ論_レお_レき。
てありとぞ。又神門寺形_レる_レ書_レの_レ事_レを。高野山青巖寺經
庫刻本の野山名靈集不_レ。かの頓阿の高野日記にいろ

はの談を擧て。大師真筆を以呂波を。今雲州の神門寺
に在る靈寶とし。同真筆の片假字ハ。當山の講坊に在
て秘藏す。といへるも。りねて。死おゆきバ。出雲人
ふたよりて尋ねあをせよるふ。おの事さたふ由あり
て。其所に宰どちたる人の。寺僧不質問々るふ。以ま其
真筆ハもふれ失せ。それを臨摹せりといふ古き楷り
た木のみ藏傳へせりと答へ。とりいと慥みきけりと
云へり。然ればその神門寺なりしも。真ふ空海の書る
ふこそを有り。かくて今その摹本どもを見るふ
並ふ尋常のおとく。いろはにほへど。云々の字體を七

字法。をねちがきふ六行に書れ。急ひもせず。五字
を。その次は行ふ書止。先て。さく京字ハ無くて。別な数
の字。一より十まぐを一行ふ。百千万億。四文字を次
に行ふ。行體に書り。おもふ空海おの假字を書さ。ご
考て。いつも人の手本を。然書きて与へける。倣ひ
て。上弘法大師手譜に引よる記ふ。假名の次。様と。今
云へるところ。論へる趣をも。あ。考合すべし。今
世もねよび。お。其を兒童あどのひろひとみふ。
一らどりづ。よみねるおどの如く。ねりき。りて。つ
ひる歌のおとく。もあらぬ。よさまとも。ねりしも
のねる。か。かく記。お。後。神門寺の縁起を見
るふ。弘法大師おの寺。參詣。伊呂波

○假字本末上卷之上

○七

を作まりと云ひ。又下文ハ其時大社大明神和字四
 十八字を作りた。おるりともいひて。京字の何るも
 新をも。仏教の意も。て説く趣。又その書。一。あま
 と拙く。すべ。法。師。が。作。れ。る。安。説。お。と。著。く。論。ふ
 近き世。み。ぬ。も。の。あ。が。ら。れ。る。安。説。お。と。著。く。論。ふ
 書。そ。へ。り。さ。や。あ。の。世。は。伏。見。天。皇。の。宸。筆。ま。と。尊。圓。法
 親王。形。り。と。て。い。ろ。は。假。字。を。摹。一。傳。へ。る。も。も。法
 空海。の。書。る。と。同。小。體。は。見。ゆ。但。一。是。ハ。真。の。形。り。や
 諸。あ。ら。び。お。と。倭。片。假。字。互。切。義。解。の。未。お。追。考。と。て。載
 られ。る。い。ろ。は。かく。て。古人。の。筆。跡。を。監。定。む。る。人。お。
 假。字。も。全。く。同。し。は。かく。て。古人。の。筆。跡。を。監。定。む。る。人。お。
 草假字書。と。る。もの。今。世。お。遺。在。る。が。中。に。孰。り。古。紀
 と。問。あ。た。は。る。に。紀。貫。之。朝。臣。此。ぬ。一。兼。和。二。年。空。海。滅
 十年。お。生。天。慶。九。の。より。ぞ。お。ま。く。世。お。遺。り。傳。を
 年。お。卒。七。十。九。の。より。ぞ。お。ま。く。世。お。遺。り。傳。を
 れ。里。と。い。へ。り。今。その。貫。之。朝。臣。の。を。始。ふ。次。々。に。き

おゆる小野道風朝臣。寛平年中生。康保。藤原佐理卿。天
 七年生。長徳四年。藤原行成卿。天禄三年生。万壽
 年卒。五十五。藤原行成卿。四年薨。五十六。の真跡。形
 りと云へるものを見る。お。か。の。く。く。さ。く。草假
 字に。彼。い。ろ。は。假。字。の。字。體。を。も。と。ま。く。ふ。う。る。を。し
 く書交へられざる。お。む。ね。を。見。る。お。も。以。と。は。や。く
 より書なまき。こ。り。お。む。古。體。あ。る。法。き。事。推。は。り。つ
 法。かく。て。空海。の。書。定。考。と。る。い。ろ。は。假。字。を。今。志。む
 らく。かの。二。寺。形。る。摹。本。の。字。體。お。も。と。法。き。掲。下。に
 其。原。字。を。考。注。し。又。その。同。字。の。異。體。あ。る。を。件。の。四。人
 の。真。筆。形。中。お。見。及。む。こ。る。か。ぎ。り。を。合。せ。載。す。見。合

せくおもひ。やる儘し。但しあゝまはその真蹟新筆法
 筆勢形どまをかいはらば。もたら字体を所ざやうに
 寫せり。但し漢籍に寫し載たるいろは假字の中より
 是と異形する字交れり。其を下のまおと寫し出
 づて論ふ

い 草以之 いたい 草呂之 いたるる
 ろ 草波之 にはに 草仁之 にはほ 草保之 には
 へ 片假字 へ草 へへへへへへへ 趾之
 ち 草知之 ちちちちちちち 草奴之 ぬ
 り 片假字之 りりりり 草留之 る
 と 省止之 草取訓 ともち 草知之 ち

る 草遠之 在在在在在在在
 わ 草和之 わわわ 草加之 加 草与之 よ 草之 した
 れ 草礼之 くれれれれれれれ 草奈之 なるるるる
 ね 草祢之 ねねねねねねね 草武之 むむむむむ
 ら 草良之 だらだらだらだらだら 草為之 ぬのぬのぬの
 う 草于之 草于 于字 于字 草為之 ぬのぬのぬの
 乃 草變 乃 草於之 おねく 草久之 く 草也 也
 曾 草變 曾 草片假字之 川川川川川川川

○假字本末上卷之上

○五

草変 **や** **や** **ま** 草末之 **お** **お** **よ** **け** 草計之 **ひ** **ふ**
 不之 **そ** **ふ** **不** **不** **こ** 草已之 **こ** **こ** **こ** **こ** 草江之 **て**
 天之 **あ** 草安之 **あ** **あ** **さ** 草尤之 **さ** **さ** **さ** **さ**
 草変 **ま** 草幾之 **ま** **ま** **ま** **ま** 草由之 **ゆ** **ゆ** **ゆ** **ゆ**
 草女之 **み** 草美之 **み** **み** **み** **み** **み** **み** **み** **み** 草之 **し** 草之 **し**
 草変 **ろ** **ろ** **ろ** **ろ** 草恵之 **ろ** **ろ** **ろ** **ろ** 草比之 **ひ** **ひ**
 草変 **も** 草毛之 **も** **も** **も** **も** **も** **も** **も** **も** **も** **も** **も** **も**
 草世之 **せ** **せ** **せ** **せ** **せ** **せ** **せ** **せ** **せ** **せ** **せ** **せ** **せ**
 草寸之 **す** **す** **す** **す** **す** **す** **す** **す** **す** **す** **す** **す** **す**

右いろは假字の中へりつむ。片假字をとれるも、
 片假字の事ハ下。さて釋日本紀。問假字誰人所作。
 卷論ふべし。答師說大藏省御書中有肥人之字六七枚許。先帝於御
 書所令寫其字皆用假字其字不明或乃川等之字明見
 之若以之為始歟と云。若以之為始歟と云。若以之為始歟と云。
 者論文と云。若以之為始歟と云。若以之為始歟と云。若以之為始歟と云。
 論ふまじらば。あを肥人。若以之為始歟と云。若以之為始歟と云。
 べくハ以て。あを肥人。若以之為始歟と云。若以之為始歟と云。
 明不見えとる由ある。然るをのつとを書ずして。
 の釈地地の文の真字書。乃川と真字。あを肥人。若以之為始歟と云。
 まと原本の草體。乃川と真字。あを肥人。若以之為始歟と云。
 と尋常の草體。乃川と真字。あを肥人。若以之為始歟と云。
 べくハ以て。あを肥人。若以之為始歟と云。若以之為始歟と云。

○假字本末上卷之上

○廿

先帝とハハの師説ふ先帝於御書所令寫其字といへる
のあゝの叙記せる頃より其師とありたり人の世さうり
まゝ推し上せざる先帝と稱せりハ順徳天さて肥人
皇後堀河天皇など先帝と稱せりハ順徳天さて肥人
とは肥の國人なるは古書ども不據りて考ふるお
今此肥後國を古も火國といへり後小肥前肥後
の二國とし又後に改て舊此火國の地を肥後とし筑
紫此今の筑前筑後とに接する地を割て更に肥
前國と定ぬらきたりと聞ゆれむ此説ハ古事記小筑
紫鳴を有面四と見
えとるよ日本書紀肥前肥後の風前後の國出来て後
土記を考合て別ふ委しく云へり肥國也も呼び其國人を肥
も於昔を肥後をきくに肥國也も呼び其國人を肥

人とも呼へりサツ續紀文武天皇四年六月の下に
薩末人ムム肥人等持兵云々と記されぬ是なる
べし豊國吉備筑紫越の國々を前後に割たれし後も
於布其舊名をも呼び吉備人筑紫人越人なりと云
へる事古書どかくていろは假字世弘まり遠國の
もみ見えたりかくていろは假字世弘まり遠國の
下ざはみも漸行をきそむる頃肥の國人のいまだ能
も書熟れざりけるが調物ミツギモ於と進る時ふらふく
くかきて出せる書のをうく免つらうり々於ハ
國司よりと副々奉れるを大蔵省ヲサメに収置けるが在
し於るはし近き年おろ蝦夷人といろはを習せし
に書於るはしあるがかへりてハをうりた方ふも見えた
りとさたり松前へ渡りて帰りとる人のかとりき肥

○假字本未上卷之上

○注

人の書みおもむ松下見林の書せるものの中に今西
合せられておもむ肥後字不書たりと云ふと以り古諺所遺せるなるは
りといふと以り古諺所遺せるなるは
部か肥人書五卷薩人書と並べ載せり肥人書五卷と
ハかの有肥人之字六七枚許と云へる書みと云ひ薩
人書と云ひ其書と云ひ薩摩人の書みと云ひ薩摩人の
ト類子書たりハ薩摩人の書みと云ひ薩摩人の書みと
記傳都人ハ因りて地名と云ふ由鈴屋翁古車
む人書を隼人國と云へ
國人を隼人國と云へ
り人書を思ひ合すべし加くその國を隼人國と云へ
あり書籍目録の帝紀部載せるるるるるるるるるるる
もと次なる公事の部載せるるるるるるるるるるる
れとる共大蔵省不在なるらららららららららららら
きる共大蔵省不在なるらららららららららららら

けむ又おもふ肥人薩人とし記せるハ其書も
より公ざまらぬもの記せるハ其書も
せらるる肥後州薩摩を薩州なりともけむと云ふと
づらら肥人書此乃川の字事ハ別ふ又かくていろ
一説あり下巻の末ふ加へていふべし
は假字漸世不行をるふあをせりもやより書来れ
る假字の草體をもおもやうに書交へ又さらふ書出
せるも世々ふ多くあまらるものなるは今かの賈
之ぬしをはし先四人のぬし其蹟中ふ見および
たるいろは假字なりぬ草假字の體をうけしと云
つ免て左ふかきほく但し真假字を行草の體ふさ
り不書るがまじきるハ多くをもらしつ

○悔移伊伊○所路○志者之

○兵者○音者○光盤○ハ八○小尔○子子○可可

耳耳○子子○丹丹○二二○布布○不不○水水

○至遲○地地○里里○利利○梨梨○怒怒

○類類○流流○累累○越越○字字○年年

○乎乎○王王○家家○可可○開開

○与与○余余○堂堂○多多

○麗麗○連連○所所○處處○楚楚

○徒徒○都都○津津○年年○那那

○羅羅○牟牟○山山○年年○朗朗

○舞舞○有有○井井○無無○九九

○能能○濃濃○農農○九九○九九○具具○九九

○耶耶○滿滿○万万○氣氣○今今○分分○分分

○个个○遺遺○希希○布布○婦婦

○集集○のの○歌歌○よよ○いい○不不○良良○とと○書書○りり○牟牟○字字○のの○省省○形形○りり○四四○人人

古	古	古	古	古	古	古	古	古	古
要	要	要	要	要	要	要	要	要	要
衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣
阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿
支	支	支	支	支	支	支	支	支	支
兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛
裳	裳	裳	裳	裳	裳	裳	裳	裳	裳
須	須	須	須	須	須	須	須	須	須
數	數	數	數	數	數	數	數	數	數
壽	壽	壽	壽	壽	壽	壽	壽	壽	壽
帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝
起	起	起	起	起	起	起	起	起	起
面	面	面	面	面	面	面	面	面	面
志	志	志	志	志	志	志	志	志	志
非	非	非	非	非	非	非	非	非	非
火	火	火	火	火	火	火	火	火	火
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
起	起	起	起	起	起	起	起	起	起
阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿
起	起	起	起	起	起	起	起	起	起

し

無之鼻音。无之草变。片假字作九。○鴨長明が抄ふ。古人云。假字にものかく事を云々。ねきるも。入聲のも。書のくき。形どを。バ。み。形を。く。かく。なり。万葉。ふ。新羅。を。む。志。ら。と。加。り。古。今。の。序。ふ。喜。撰。を。バ。き。せ。と。あ。く。是。ら。之。形。其。證。あり。と。云。へ。り。を。祢。と。る。も。と。此。ん。字。を。い。へ。る。言。あり。顯。昭。の。古。今。集。注。物。名。中。の。く。た。ま。と。い。ふ。由。の。説。み。シ。ト。云。フ。文。字。ハ。無。キ。ヲ。ヒ。ト。ヘ。ニ。ト。カ。ナ。ラ。ツ。ケ。ム。モ。サ。ス。ガ。ニ。ア。シ。ケ。レ。バ。外。書。ニ。ハ。ハ。ヌ。ル。ト。キ。ニ。ハ。ジ。ト。書。ハ。ベ。ル。ナ。リ。同。ジ。ニ。モ。ジ。ナ。レ。ド。モ。シ。モ。ノ。テ。ム。ヲ。ハ。子。テ。カ。ク。ナ。リ。あ。と。同。人。の。袖。中。抄。ノ。縁。の。字。音。此。論。ハ。え。に。と。ハ。え。ん。と。云。詞。形。り。す。意。を。ね。たる。文字。ハ。以。何。ま。も。假。字。を。バ。ふ。と。つ。づ。く。る。あ。ま。を。祢。と。る。う。形。の。文字。な。死。故。形。り。あ。ど。い。へ。り。お。れ。ふ。よ。れ。バ。草。假。字。の。に。を。ん。と。書。き。片。假。字。の。ニ。を。と。と。あ。く。も。と。も。下。の。點。を。を。祢。と。る。形。り。然。る。ふ。上。に。挙。ぎ。る。お。と。く。無。を。も。ん。と。書。と。る。ハ。も。と。ハ。仁。より。出。ぎ。る。書。ざ。ま。が。ら。無。を。鼻。音。不。唱。ふ。る。か。こ。ふ。も。用。ひ。又。正。しく。無。と。い。ふ。ふ。も。轉。し。か。よ。え。て。用。ひ。と。る。

○假字本末上卷之上

○廿四

ものなるべし。形布片假字の下の
下ふ記せる説をも考合をべし。 ○ 疊字例く。 一字之疊

万ふく。 やうく。 二字之疊 ことれく。 三字之疊 せと

のちみをあまてはやりく。 六字之疊

形布有りつぎにばちれど。うはくおとせるもありぬ
けくもとよりかのみが見れよばざる以て多うはべ
々れど。准らへてにちかるけく。形布かの四人形ぬ
しきちれ真蹟形りと以へる中より。歌と川づぬ
き出して。形布よそに臨寫して。その手此風をあらを
は。

貫之朝臣

けいふありやうはぬ

まのそれ

いんそんよる

うんえ出るれ

道風朝臣

しあねをうまよとまけまの

うまぬのうらうれ

佐理卿

あがきも我もわらわりのりも
そりまはちもそりまはち
見え

行成卿

わらわりのりもわらわりのりも
ほりれつわらわりのりも
あがきも我もわらわりのりも

かくおぼし。遠江國巖室山牛鼻と云ふ巖岨空海
見るが在りて其撮寫たるを見ふる歌の碑乃彫
あり車の法のみちひら歌の體といひさらきふり
書り手のすぢといひる歌の體といひさらきふり
碑ハ。いと遠らぬ。或る後其國人の造りて建つ。又
土佐日記一本。跋ふ。土佐日記。以貫之。自筆本。故將軍
世之重寶也。今度密々。自依。或人。數竒深切所望書之。古
小河幕府申出。遂一覽。代之假字猶蝌蚪。未愚。臨寫有魯魚乎。後見。鞆察之而已。
明應壬子仲秋候。亞槐藤原。と記されたる事見えり。
今按る。古代之假字猶蝌蚪。と云。後世の形べり。此手
の風とを異さま。形るが故。ふいと讀が。かりし由を

おとこりぬる文ぶんなり。漢國まんこくみそみそ蚪とと稱なづへる古字
有魯魚ありうぎょ乎やとて字體じたいの相あ似にたるをよよかりととも非ひず又
み誤りてあや寫したるが所ところらむととなり。かか日ひ記きハ。殊ことみ
いさいささももつつととりり無なく。ははしし書かふふものものせせられた
ままししるる法はしし。上かみふうふう川がわしし載のたるたるるががおおととたたははしし書か
手てのの風かぜを見みるるもも。おおももををややららるるなりなり。さてさて彼かぬぬ
のの世よざざううりりああまましし延の喜きのの頃ころハ。空くう海かいのの滅めりりととるる兼けん和わ
れれああろろよよままままづづららにに七しち十じゅう年ねんははりり後ごののああいいさ
ささううももううひひくくくくげげなりなり。然しかむむかかままふふものものせせられれと
ままるるそのそのああみみをを思おもひひやるやるふふもも。以もててははやくやくよりより歌
なりなりとと書かふふもも。草くさ假かり字じををももてて書かくくああららひひなりなりととるるふふ。い

ろは假字の又さらふ便よたふ習ひて。殊み形さらら
に書く習と形りたる世あれむなる法し。さらばを
たとひ已獨ハよく書得たりとも。人の見る光をも心
まべきわざなるをや。さて然書く假字を草假字とい
ふた。もと假字を草に書あざら免む形も。みも
見えざるハ。枕草紙ふ。人れさうあかたさる草席と
まいて。御らむず。誰がまらあらむ。かまみ見せさせ
まへ。それぞ世あゆる人の手ハ見知て侍らむと云々。
と云するあれあり。顯昭けんせう形かたち古今集序注きんしゅうじゆ形かたち跋はくふ。或説貫
之之草假字序しよ詠えい紀淑望きしゆぼう令書真名序れいしよまなな云云いんいん。とも記せり。

形亦ある。正しくハ草假字と云ふ。誤りあり。さき
とはやくよりつねおをたぐりあとの云ふ。あれ
宇津保物語。菊宴。卷。神樂の。召入を催す。とある。の
文。お。知。くら。文。て。お。く。に。さ。う。か。き。つ。け。り。
つ。ろ。は。さ。さ。す。ま。を。と。あ。る。も。草。假。字。の。事。如。く。お。
あ。ゆ。れ。ど。さ。と。た。文。義。き。あ。え。が。さ。き。を。一。本。お。さ。う。の。
形。お。れ。つ。け。て。と。あ。る。ハ。草。名。を。書。て。と。い。へ。る。も。て。其。
意。と。ほ。り。て。た。あ。ゆ。れ。む。さ。う。が。お。と。書。る。本。ハ。誤。り。
平假字といふ混る事古くをたおぬ。称。又。西宮記。お。
元慶六年日本紀。竟宴。歌の事を。以。假。名。字。書。詠。句。と。何。
る。を。真。假。字。形。き。と。他。の。漢。文。形。る。が。故。お。然。を。云。へ。る。
形。り。す。べ。漢。文。真。字。書。等。お。中。お。あ。ら。む。を。バ。歌。お。ま。
れ。辞。お。ま。形。た。に。假。字。と。云。ふ。誤。り。お。と。り。形。り。さ。

て歌をねきて假字もて文お書とてのふるハ心川の
ほどより此事形りたる。古今集。小町が妙歌の詞
書に。あ。お。志。れ。り。ける。人。お。や。う。や。く。あ。れ。が。と。み。あ。り。
たる。あ。お。ど。よ。焼。け。たる。茅。の。葉。お。ふ。を。さ。し。つ。ろ。
は。せ。り。たる。と。有。り。小。町。を。小。野。小。町。形。り。その。小。町。が。
世。の。ほ。ど。ハ。遍。照。僧。正。集。に。嘉。祥。四。年。長。谷。寺。み。と。小。町。
と。歌。と。み。か。た。と。と。あ。と。見。え。り。小。町。が。世。ざ。か。り。の。あ。
ろ。と。た。あ。え。り。そ。ま。が。妙。の。世。ざ。う。り。を。推。量。る。よ。空。海。
が。卒。れる。お。ほ。ろ。仁。明。天。皇。の。御。世。お。頃。あ。り。形。る。
頃。お。り。心。を。ゆる。茅。お。葉。お。さ。し。と。る。あ。ら。ハ。假。字。お。み。お。

て。其中に書たりける歌をとりて載られきりときあ
ゆ。然きバそのあみすでに阿まねく假字ふら書く世
形り事れし知られき。但し今世お傳なきる
ハ。寛平の菊合。后宮歌合など。ひきり假字の文阿
里。其後貫之朝臣の昌泰元年大井川行幸の時奉きる
歌の序。延喜五年の古今和歌集の序。やその後お書
りし聞ゆる伊勢の日記。此日記伊勢家集の始お収む
日記といふも云へる事ハ。おのき其文を別お
ものし。表章伊勢日記といふ書お注へり。兼平五年
の頃記せる貫之ぬしの土佐日記あり。あの中納言藤
原兼輔卿に作らるる海物語あり。ひきゆる堤中納言
物語あり。此卿兼平

三年五十七ふ。その物語のおもたぬ方おとまりする
と。幾多あり。少將の巻おむりし物語おどろぞかやう此事はきお
ゆるを云々。海おとに物語おるきつけたる阿りさま
ねとるまどく云々。又少將殿よりとて御おみあり云
云。又虫おづる姫君の巻お。姫君の事を假字ハあご書
ぬたざりしきハ。假字とハ草
假字あり。かごあんかみて云々。と
あるおどをおもふおも。其かみをやくより阿まねく
草假字を書た。又物語文の世お多のり趣あるを。此
かき考合せて。假字文書熟きりける世お久し。おし
ちあるはし。さて又伊勢物語ハ。藤原範兼卿の和歌童

○假字本末上卷之上

。北

蒙抄。業平が手づゝあらかみ屋簾に書ける伊勢物語
の書ける朱雀院の塗籠にありけるも云々。と見え。真名本
の書ける説有りて。玉がつまに載らまきけるが如し。古今
集。此物語をとりて載らまきりと見ゆる事。其歌は
詞書にても知られり。其を集中のべの例に似ず。
長くて。皆あ物語に見え。詞書のり。おげらあるむり
ほりと異らざるをもおもふ。業平朝臣を元
慶四年に卒むる。其近き世に記されたるもの
とせむるも。古今集撰はまよる頃より二十年餘り前
つうに書るへ海に當れり。此物語を。業平朝臣おも
有。あともあら。おと。心のおもむくま。自
書ある。今その涯に歌をさへお作りて。書載るる

書けるを。後。他人に書加へせる文。お交ま。かきあれ
るもの。おる。此説別。又。考記せるものあり。かきあれ
考れも。ふに。女。おふ。み。を。草。假。字。も。あ。れ。あ。と。一。部。の
書。お。書。お。す。は。り。に。あ。り。た。る。を。嵯。峨。天。皇。に。御。世。空
海。が。み。さ。り。り。お。ま。け。る。頃。す。て。お。あ。り。り。む。さ。る
習。お。あ。り。け。る。に。あ。て。せ。て。空。海。が。意。匠。も。て。草。假。字。を
又。さ。ら。に。省。して。お。ご。ら。り。お。書。出。し。き。る。い。ろ。は。假。字
の。便。よ。お。が。う。へ。ふ。性。靈。集。に。載。る。空。海。の。奉。獻。筆。表
草。藁。之。別。臨。寫。殊。規。大。小。非。一。對。物。隨。事。其。體。衆。多。云。々。
機。管。云。々。謂。五。指。共。機。其。管。未。吊。筆。急。疾。無。體。之。書。或。起
藁。草。用。之。と。云。へ。り。藁。と。ハ。草。を。ま。と。省。せ。る。由。の。名。稱。お。り
る。お。ご。ら。り。の。體。の。正。を。お。も。ひ。く。い。ろ。は。假。字。の。名。稱。お。り
ほ。せ。る。も。の。お。る。お。し。ち。と。勅。賜。屏。風。書。了。即。獻。表。の。中

○假字本末上卷之上

○三

古人筆論云書散也非但以結裹為能必須遊心物
散逸懷抱取法四時象形萬類以此為妙矣是故蒼公風
心擬鳥跡而揮翰王少意氣想龍爪而染筆蛇字起唐綜
與書發秋婦軒聖雲氣之興務仙風悲之感垂露懸針之
體鶴頭偃波之形騏驎鳳凰之名瑞草芝英之相如是六
十餘體者並皆入心感物而作也或曰云々又作詩者以
學古體為妙不以寫古詩為能書亦以擬古意為善不以
似古跡為巧所以振古能書百家體別云々空海儻遇解
書先生粗聞口訣云々獻梵字并雜文表文之中弘
結繩廢而三墳燦爛刻木寢以五典鬻興明皇因之而弘
風揚化蒼生仰之而知往來不出一戶庭里對目不文
聖智三才窮數贊古温故自垂範非書而何矣云々文
字之義用大哉遠哉云々云へる事も見ゆ
かゝる見識の意匠をもち用むる事も見ゆ
ほとけといふらむものごとくねほやけざまを
と免て世に人におが免られちと前の世にも比おれ
手書みく草聖と称らまゝなる空海の佛法に意をさへ

ふとりて歌を作りとくねへざるをいと何ぞかく
免てはやせるまゝおたのげらる假字書の楷模に如
くなりてもとより此草假字も其體に准據たまはま
す省しつらねざら免書く事漸おあまねくありつる
が故に後世にねよびて空海のいろは假字をもて
草假字の始のおとく云傳ふるおとわざと取りぬる
ものあるはし貝原好古が字體の原始を諸書を参考
驛馬を走せ羽檄相傳ふるお篆隸の書起急の用は堪
へば張白英に至て其法備は漢の世よりときあゆ
漢の張白英に至て其法備は漢の世よりときあゆ
り何あや皇國の草假字を准ふはきよハ何らね
ど漢字を假字に用ひぬるは空海志ろておのつらら
體も漢字を假字に用ひぬるは空海志ろておのつらら

○假字本末上卷之上

○冊一

を製_レてより漸_クそま_レる效_ハひて遂_ニ一_種の草假字此
英と相似_ルるをおもへど空海ハおのづ_ラかの張白
りともいふ_レ趣_ハ。さくま_ニと三密房が大師傳といふ
書に。嵯峨天皇よ_リ空海の賜はりたる御製詩を載て
深山居住振_テ奇名。氷玉顔容心轉清。世上草書言_テ為_レ聖。天
縱不謝張伯英。暫乘雲嶺一念隙。書得綾羅四帖屏。初見
筆精鸞鳳體。清看墨妙虬龍形。中絶妙藝能不可測。二王
没後此僧生。既知風骨無人擬。収置秘府最開情。と見え
ぬり。御手いと善くあそは_レしと申傳へ奉れる。此
天皇すら然_カむり讚美させ_レぬ_レる_レに。おと續日
本後紀。美和二年三月丙寅。大僧都傳燈大法師位空

海終于紀伊國禪居。庚午勅遣内舍人一人。吊法師喪。並
施喪料。云々法師者讚岐國多度郡人。俗姓佐伯云々。在
於書法最得其妙。與張芝齊名。見稱草聖。年卅一得度。延
曆廿三年入唐留學。遇青龍寺惠果和尚。稟學真言。其宗
旨義味莫不該通。遂懷法寶。歸來本朝。啓秘密之門。弘大
日之化。天長元年任少僧都。七年轉大僧都。自有終焉之
志。隱居紀伊國金剛山寺。化去之時年六十三。と載され
り。空海の死去れる美和二年より。あの紀を撰び終
了奉られたる。貞觀十一年まで。三十四年を歴ぬり。空
海始て草假字を製_レて。世に用ふる事とありき_レらむ

も。件の傳ふ其功をも記さるべきに。書法の妙を得
たる事と。草聖と稱へる由をのみ舉載されたるは
やく草假字の如く。世に行きたる。一故。いろ
は假字作まる事。字り已れても舉られざりける
る。後し。志あるに性靈集。僧觀賢が空海が諡號を請
表云。兼究臨池之妙。緇素皆成倚賴。倭漢推為楷模。と
へ。其の上表。此時弘法大師畧頌の阿闍梨道範。件
注。延喜二十一年十月二十七日と云。其の
事。文。倭漢と云へるを。倭字漢字の義。倭字とは
當時。草假字をさして云。ゆる文と云。其の
事。取ら。吾妻鏡。取る。建久貞永等の頃。此文。草假字

事。和字と書けるも。そののみ。やくより。此稱な
る。取ら。又。文。永三年。仙覺律師。万葉集の跋。小
倩案事情。天曆御宇。源順等奉勅奉和之刻。あのと
り。定於漢字之傍。漢字といへり。本書の歌の漢字を
付進假
名。欵。あ。の。假。名。と。い。へ。る。ハ。片。假。仍。慕。往。昔。之。本。故。先。度。
愚。本。於。漢。字。之。右。付。假。名。畢。是。則。其。德。非。一。其。德。者。一。者
料。紙。三。分。之。一。書。寫。惟。安。二。者。和。漢。と。ハ。和。字。の。謂。ハ。草。假
字。の。事。を。い。ひ。漢。と。ハ。本。書。の。歌。の。漢。字。を。い。ひ。和。字。と。ハ。草。假
字。を。い。ひ。漢。と。ハ。本。書。の。歌。の。漢。字。を。い。ひ。和。字。と。ハ。草。假
漢。別。時。短。歌。猶。以。校。勘。有。煩。何。況。於。長。歌。乎。三。者。若。和。若
漢。訛。謬。無。隱。云々。或。本。の。仙。覺。生。年。四。十。五。と。稱。て。書。る

假字本末上卷之上

世

跋りは抑万葉集和字出来之後者。和字とハ草假字なり
假字を普く世に用ふる世と漢字歌一首書了。又更書あり
ありてといふ意とたあゆ。常習也。是者不知漢字男
假名歌事字をいるなり。草假なり。女等為令見安なり。
まれのるなり。漢字なり。對へる。和字ともいふなり。
觀賢が表文なり。緇素成倚頼。倭漢推為楷模。といふなり。
も。空海をもて。真字なり。も草假字なり。世人の楷模と為なり。
といふるなり。空海をもて。漢國なり。て書の楷模なり。
考合せて知るなり。因なり。云なり。上なり。引なり。ぎるなり。をなり。やなり。あなり。はなり。らなり。
云なり。天曆御宇源順奉勅宣令付假名於漢字之傍畢然又
法性寺入道殿下道張公為令獻上東門院仰藤原家經

朝臣被書寫万葉集之時假字歌別令書之畢爾來普天
相達云々然而道風手跡本假名歌別書之古老之說有
字の右傍に賢勸之と云へり。今推考るに順之古歌の
たり。かくて家經の由を附らる。左方より然書きし
假字ぞ似つる。前なり。の世なり。道風なり。の長公なり。の草假字なり。
家經の古說を疑へる。世道風なり。の長公なり。の草假字なり。
云へる古説を疑へる。世道風なり。の長公なり。の草假字なり。
歌を添く事なり。の遺なり。古人の書の例なり。如くなり。の草假字なり。
一なり。二なり。三なり。四なり。五なり。六なり。七なり。八なり。九なり。十なり。
手見たり。肥後國なり。本なり。妙なり。寺なり。本なり。紀なり。竟なり。尊なり。親なり。王なり。のなり。御なり。
きま。かくて。いろは假字を。手習ふ。人の。は。免。と。し。
る。形。ら。ひ。え。延。喜。形。頃。より。ハ。は。る。り。に。後。の。事。形。る。法。

一。その古今集序に難波津の歌ハ。帝はたほむを^し免
り。浅香山のあとのを^は。采女はきこふきよりとみ
て。此ふ^と歌ハ。歌の父母はやうふてぞ。手習ふ人の
ト免もも忘ける。と云え。難波津ハ男の歌。浅香山を女
ぎる免でとた歌あれバ。歌の父母はやうふてぞ。手習ふ人の始
免いひたる説の有りたり。歌の父母はやうふてぞ。手習ふ人の始
もも書く例とあり。源氏物語若紫巻。紫上はをさ
たる由ある。源氏物語若紫巻。紫上はをさ
きと免事。おと難波津をさふ。はあ^くう^はき^く
けをべらざ免。かひあ^くむ。といひ。草假字ハ。難
だふち^ち書^る事^ハ書^つバ^くる^事ハ^えせ^ぬほ^ど源
れむ。み^み那^ど書^く事^ハえ^せざる^より^下文^ハ源
氏^のか^の御^を那^ちが^きあ^ん見^ぬへ^まほ^した^のと
まへる^をも^も知^るは^し此^の物^語ハ。長保の末より寛

弘のは^し免^事頃^まぐ^に作^らる^{もの}ある^はき^由。
安藤為章。紫女七論の中。論へる事あり。枕
草紙。御硯とりねる^て。とく^く。き^くね^もひ^また
さで。難波津もて。ふとねほえむことを。とせ免あふ。
此草紙書る清女納言も。紫式部と何るをねもふ。はし。
但し上ふ引さる如く。堤中納言。物語の虫免。川る姫君
免卷。假字をまご書ぬえさ。ま^はね^バ。か^とあ^んあ^ふ
て云々。と何る。その下文。同じ姫君事。おかけて。白
免扇。此墨ぐろふ。後者の手あらひ。あ^とる^を。さ^しいで
と云々。とあるを思へむ。そのあみ大うと手習のまじ
免。また。ま^は片^の假^字を^かき。此片假字書く由ハ。つぎに
下巻。論ふべし。

○假字本末上巻之上

○廿五

真字を一己とすものにて。さう草假字ももう作りて
書くあらむ。か難波津浅香山ハ。その草假字を
はし。考て。知らふと。記ふ。かく。多然し。取りし。ある。後し。
此手習。次。第。の。事。を。そ。の。み。世。の。中。あ。と。く。然
の。序。の。大。云。へ。る。も。堤。中。納。言。物。語。あ。る。さ。れ。き。る。も。其
の。み。の。大。の。お。の。て。お。り。を。も。て。云。へ。る。ま。て。今。あ。り。に
論。ふ。も。そ。の。お。の。て。お。り。の。大。方。の。さ。ま。を。お。し。た。か。り。て。云。す
る。お。り。の。父。母。お。や。う。お。て。徳。何。る。歌。あ。れ。む。手。習。ひ。そ。の。お
る。歌。の。見。ゆ。昔。お。手。習。始。む。い。ろ。は。能。書。の。手。本。多。く。あ
此。二。歌。を。お。ら。ひ。け。る。お。や。と。も。法。さ。お。り。し。さ。て。い
ろ。は。假。字。を。手。習。お。始。と。せ。る。事。お。の。み。見。え。と。る。た。
江。談。抄。ふ。天。仁。二。年。八。月。云。々。問。曰。假。字。手。本。何。時。始。起

乎。答云弘法大師御作云々。此全文を上にのみえとす。い
ろは歌の事を。うちまうせて假字手本と云するを思
へむ。當時ツカをやくより。あまねく兒童の手本お始に書
て與ふる。知らはしとあり。あり。台記ふ。久安六
年正月十二日。今日今麻呂叅御前。依勅書。伊呂波と見
え。久安六年ハ。江談見え。天仁二年より。四
頼長公の三男。隆長公。お童名。お。又。古今著聞集。ふ。二
條院。天皇。お。御。世。の。事。お。や。と。て。云。い。ろ。は。の。連。歌。お。り
り。を。云。々。と。い。ひ。て。う。り。お。い。ろ。は。當。時。す。て。お。い。ろ。は
歌を。打。ま。あ。せ。く。以。呂。波。と。云。ふ。事。と。お。り。たり。し。と。聞
え。但し。い。ろ。は。歌。と。云。へ。る。事。古。書。と。も。お。見。徒。然
あ。ら。ざ。れ。ど。然。い。ふ。後。き。あ。と。り。お。り。あ。り。見。徒。然

○假字本末上卷之上

○廿六

草子。延政門院の書きたるおはしは、
ある人ふ。おとづてよとて申させぬひけり御歌。ふと
つも。一本ふか牛形角のほぐり。どがみり
とぞ君をお回る。こひしく思まらせぬふと
直のり。御歌の意ハ。こい。の字は様をもて隠
直のり。御歌の意ハ。こい。の字は様をもて隠
院ハ。後嵯峨天皇の皇女。悦子と申奉れる御事。て。弘
長二年。お誕生させぬへ。其幼くおはし。まて。いろ
は假字習ひぬへるほどの時。御事あるは。當時は
やくより。皇子たちも習ひぬへる御例。なりけむ事推

して知。吾妻鏡。貞應三年四月廿八日。有若君御
云。長生殿詩。云々。と云々。御手本。昨日。自京都。参着。云
りて。古も。今も。尊き。身。人。心。賀。の。句。を。用。ひ。ぬ。へ。る
の。例。を。推。は。り。て。云。へ。る。あり。方。さ。て。假。字。手。本。終。ふ。
京。字。を。書。け。る。た。か。の。空。海。の。真。跡。と。い。ふ。る。本。ふ。た。無
し。上。引。き。る。江。談。等。の。説。ふ。も。き。お。え。は。河。海。抄。の。江
本。事。の。問。答。の。次。ハ。一。説。を。奉。て。伊。呂。波。有。三。段。イ。口
ハ。二。ホ。ヘ。ト。チ。リ。又。弘。法。大。師。の。作。京。或。説。ハ。慈。覺。大。師。と
レ。ワ。エ。ヒ。モ。セ。ス。迄。弘。法。大。師。の。作。京。或。説。ハ。慈。覺。大。師。と
あり。伊。呂。波。を。護。命。弘。法。大。師。の。作。京。或。説。ハ。慈。覺。大。師。と
事。仲。雄。王。の。詩。句。を。明。了。の。京。字。を。慈。覺。大。師。の。作。京。或。説。ハ。慈。覺。大。師。と
有。る。傳。も。お。ぼ。つ。ろ。取。可。が。慈。覺。大。師。の。作。京。字。を。慈。覺。大。師。の。作。京。或。説。ハ。慈。覺。大。師。と
あり。加。く。又。空。海。の。朝。作。り。以。呂。波。界。注。東。寺。所。傳。於。是
護。命。以。下。三。句。空。海。の。朝。作。り。以。呂。波。界。注。東。寺。所。傳。於。是
止。已。以。四。十。七。字。故。若。依。同。門。所。傳。取。加。頓。阿。高。野。日
京。一。字。と。い。へ。り。あ。も。同。門。所。傳。取。加。頓。阿。高。野。日

假字本末上卷之上

。世

記ふ。いろはの四十八字といふ。歌も京字をよみと
 れど。そのあみすでに世も普く京字を書添る。形らは
 一と形もたり。ものあまたり。頃阿文。中元年八十
 り。さてその後。形もの一説を注され。おとく。善成公
 形。河海抄。形。京字の上。い。ろ。は。も。小。の。か。ら。お。の。い
 ろ。は。連。歌。形。句。の。上。い。ろ。は。も。小。の。か。ら。お。の。い
 意。て。よ。歌。形。句。の。上。い。ろ。は。も。小。の。か。ら。お。の。い
 韻。集。の。序。不。借。于。色。葉。七。行。四。十。八。字。之。假。字。云。々。と。新
 る。も。京。字。を。加。へ。て。云。へ。る。形。四。十。八。字。之。假。字。云。々。と。新
 の。ま。の。法。知。ま。假。字。づ。う。ひ。の。や。う。大。方。一。字。を。置。て。ま。い。ろ。は。
 合。字。の。法。知。ま。假。字。づ。う。ひ。の。や。う。大。方。一。字。を。置。て。ま。い。ろ。は。
 形。三。字。を。合。せ。て。京。の。音。と。あ。る。此。の。一。字。を。置。て。ま。い。ろ。は。
 字。の。法。を。口。傳。し。て。教。へ。る。形。五。の。音。と。あ。る。此。の。一。字。を。置。て。ま。い。ろ。は。
 文。字。の。中。に。京。字。を。と。り。て。示。せ。る。次。不。一。二。三。つ。り。百
 千。萬。億。の。字。を。二。行。ふ。書。り。は。七。行。の。次。不。一。二。三。つ。り。百
 つ。と。よ。る。て。其。假。字。を。も。書。り。傳。せ。る。其。數。字。を。し。と。云。へ。り。

但し空海の真跡といふ。かの當麻寺神門寺。形をいへ
 る。み。其。形。ら。む。ま。並。ふ。京。字。ハ。無。き。を。以。て。也。る。真
 跡。を。と。り。ま。て。京。字。の。事。さ。て。草。假。字。形。事。の。古。書。ど。も
 を。さ。ど。せ。る。い。ろ。は。の。事。さ。て。草。假。字。形。事。の。古。書。ど。も
 に見ゆ。りたるを。い。さ。し。り。終。み。い。て。古。形。さ。ま。残
 考。ふ。る。く。さ。た。い。と。い。べ。し。土。佐。日。記。の。始。ふ。を。と。こ。の
 す。形。る。日。記。と。い。ふ。も。の。を。女。も。し。て。み。む。と。す。る。形
 里。そのあま。草。假。字。を。も。た。ら。女。文。お。ど。不。用。ふ。る。あ。ら
 形。ひ。あ。ま。か。く。い。へ。る。此。日。記。を。女。の。記。せ。る。書。の。如。く。と。り
 旅。の。ま。ま。れ。日。記。を。假。字。み。の。書。く。源。氏。物。語。須。磨。卷。ふ。さ
 べ。の。手。ま。か。ん。あ。の。も。形。が。ら。源。氏。物。語。須。磨。卷。ふ。さ
 う。の。手。ま。か。ん。あ。の。も。形。が。ら。源。氏。物。語。須。磨。卷。ふ。さ
 日。記。の。手。ま。か。ん。あ。の。も。形。が。ら。源。氏。物。語。須。磨。卷。ふ。さ
 い。へ。り。此。文。下。に。引。渡。し。同。書。不。安。倍。仲。麻。呂。朝。臣。唐。

○假字本末上卷之上

其

を以てするところあり。かの國人聞たるおどくおほえと
れど。事終あつるを。男もトにさまを書出して。あつるの
あまを流さへせざる人ふ。以て志らせられむ。心をやれ
き得たりけむ。以とおもむ。終ほりも。終む。終で。終る。男
ト。ま。さま。を。書。出。し。て。皇。國。語。を。知。れ。る。歌。の。趣。を。真。字。に。て。漢
文。に。書。出。し。て。皇。國。語。を。知。れ。る。歌。の。趣。を。真。字。に。て。漢
歌。詞。を。云。ひ。知。ら。せ。し。る。由。り。男。も。ト。ハ。草。假。字。ハ
つ。ね。女。の。用。ひ。を。知。ら。せ。し。る。由。り。男。も。ト。ハ。草。假。字。ハ
を。別。字。と。以。て。書。く。も。其。意。を。え。り。て。草。假。字。を。女。手。
真。字。を。男。手。と。以。て。書。く。も。其。意。を。え。り。て。草。假。字。を。女。手。
を。書。く。へ。よ。り。の。詞。あり。紫。式。部。日。記。み。清。少。納。言。あ。そ。志
き。り。の。同。み。い。え。う。侍。り。な。ま。人。さ。む。か。り。さ。あ。い。ど
ち。ま。あ。か。き。ち。ら。し。て。侍。る。ほ。ど。も。よ。く。見。れ。む。あ。ど。い

さ。た。へ。ぬ。あ。と。多。か。り。か。く。人。ふ。あ。と。終。ら。む。と。思。ひ。あ
の。終。る。人。ハ。あ。あ。ら。ば。見。お。と。り。し。行。す。意。う。と。て。の。え
侍。れ。む。云。々。と。云。む。て。さ。て。式。部。が。用。意。を。以。て。終。る。詞。終
中。み。云。々。と。や。う。く。人。の。以。ふ。も。聞。と。終。て。後。い。ち。と
云。ふ。も。ト。を。終。に。か。き。り。し。侍。ら。ば。以。と。て。づ。る。あ
さ。ま。い。く。侍。り。その。あ。み。女。ハ。も。は。ら。假。字。を。の。み。書。く
真。字。も。假。字。に。對。へ。て。終。り。お。も。む。た。終。り。ま。終。と。ハ
源。氏。物。語。葵。卷。に。源。氏。君。終。手。習。終。反。古。の。さ。ま。を。以。へ
る。文。も。け。が。し。つ。さ。う。に。あ。と。ま。り。お。も。さ。ま。と。不。め
つ。ら。し。た。さ。ま。に。か。き。あ。り。さ。て。あ。と。日。記。に。真。字。と。は
も。楷。書。も。と。い。へ。る。あ。り。さ。て。あ。と。日。記。に。真。字。と。は
ふ。も。ト。を。終。り。書。く。と。一。ハ。一。の。字。終。書。く。筆。決。ら。は
書。り。ぬ。と。終。り。書。く。と。一。ハ。一。の。字。終。書。く。筆。決。ら。は

○假字本末上卷之上

○卅九

よりていする文洞物語國禪卷○此物語天徳の項にておもしり。或人考へていする。女御孫君かゝる。此御手さる事。藤つがた。そのかたて奉られきる本をこそハ。手本。女手も男手ハ真字。女手ハ假字。取。志。習むる。是。それ昔のぞとて。今のをめりあせど。おと奉られざ。引く源氏物語梅枝巻。見。又同巻み。かくるほど。右大將殿よりとて。手本四くりん。いろくく。たしに書きて。花枝につけて。そんなうの君もと御文

してあり。みづからもておるべきを。お同せおと侍。一宮御手本もてまるると。是若宮の御是。うにとのたまをせ。かた。習ませぬ。つはくも侍らぬ。ねど。考へ侍り。あをねん。以そたおるらる。ときこえさせぬへ云々。御せんもてまるる。見ぬ人。黄むる。志。あきて。山吹につけぬ。志の。て。志のて。真の手もて。俗。ふいふ。萬葉春の詩。青き志。た。お書て。松につけざるはさうに。此さうにて。草書。お書たる。よ。ある。源氏物語。推。本。卷。守。治。八宮の御歌。山風。霞。ふきとく。聲。ハ。あれと云々。草。ま。いとを。融院扇合の詞。扇をうけもの。類。あてを。ま。て。

○假字本末上卷之上

そきよ歌を書る趣をいする詞み。所いでみる云々。例
の扇歌かくやうに。うをみ織つけたり。云々。まが
草假字を織つけたり。万葉書を草假字と見るまが。あを尋常の
。夏。の詩。赤き志たし。不書て。うの花。つつけたる。ハ。か
。草假字。は。ト。免。ま。を。と。こ。ふ。て。も。所。ら。は。を。ん。あ。ふ
。も。あ。ら。は。所。免。つ。ち。諸。本。あ。め。つ。ち。或。校。本。の。つ。き。云
。そ。ら。と。注。せ。る。本。ぞ。よ。き。其。あ。い。ま。一。へ。あ。免。つ。ち。ほ。一
。憲。朝。臣。此。口。遊。あ。ど。に。い。え。る。別。ふ。考。志。り。さ。て。そ。の。あ
。り。さ。て。あ。を。と。こ。ふ。て。も。所。ら。は。考。志。り。さ。て。そ。の。あ
。草。假。字。を。ん。あ。ら。は。と。云。へ。る。あ。て。行。の。體。を。以。て。あ。ら
。あ。も。字。い。ひ。し。ら。その。つ。ぎ。ふ。を。と。こ。手。は。あ。ち。が。き。ふ
。ず。あ。も。し。ろ。し。ら。その。つ。ぎ。ふ。を。と。こ。手。は。あ。ち。が。き。ふ

あ。ち。て。同。し。も。ト。を。さ。は。は。く。に。あ。へ。さ。か。り。己。が。か
。ち。て。春。あ。つ。と。ふ。る。水。ぐ。ち。も。す。そ。か。ち。り。て。や。見。え。む
。と。は。ら。ん。此。條。の。歌。ど。も。あ。ら。は。ハ。物。語。の。お。も。む。き。あ
。趣。を。あ。し。たり。と。き。こ。ゆ。か。く。て。男。手。た。あ。ち。書。ふ。云。々
。と。は。真。假。字。を。一。同。し。音。ひ。き。を。同。字。を。用。ひ。て
。書。う。へ。る。一。二。句。を。手。本。を。若。宮。と。奉。り。意。と。き。あ。ゆ。春
。さ。て。歌。の。一。二。句。を。手。本。を。若。宮。と。奉。り。意。と。き。あ。ゆ。春
。又。は。て。や。云。々。を。是。も。下。に。引。く。梅。枝。巻。あ。い。と。い。き。う
。筆。は。み。た。る。々。し。た。あ。り。て。書。取。し。安。倍。仲。麻。呂。の。も。ろ
。あ。し。ま。さ。ま。を。書。出。し。て。歌。よ。み。と。る。を。其。國。人。ふ。を。と。こ。も
。ト。あ。さ。ま。を。書。出。し。て。歌。よ。み。と。る。を。其。國。人。ふ。を。と。こ。も
。の。書。あ。さ。ま。に。切。意。を。書。て。見。せ。と。る。由。り。あ。ら。は。漢。字。の。事
。こ。あ。を。と。あ。も。し。と。い。へ。る。と。り。ハ。女。手。に。て。草。假。字。ま。ご
。い。さ。と。あ。ら。は。を。あ。へ。と。あ。ら。ハ。女。手。に。て。草。假。字。ま。ご

○假字本末上卷之上

○四十一

あらぬ紅葉とむとけうとふらし。ちどりの所ともと
まらざまらり。二三の句をいろは歌の事をかくして
詞のまじり上句おどいろはどおえちらぬと人かこら
むものぞとけう三句のうとふらしハいろは歌を
びあせたる趣ときあゆ下句ハもろあハいろは歌を
見て文字を製り初め多とハある故事をいする鳥跡を
て一首の趣ハ已が手の情あり三の句印本きあえり
らとまける意をふくめて情あり三の句印本きあえり
たよりて引り一本さしつぎあ。とふ鳥にあとあるもの
あらるまむ。雲路をふかくふみあひあん。とふ鳥あ
雁をいする。例の雁を書札の往來の事よそへ詞よも
よ免る一首ハ。其の意ハ此物語の事よそへ詞よも
みあせる。三の句あきも一本よるへつたあか
るて意得。三の句あきも一本よるへつたあか
たの。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心

ありさるる。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
いふ。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
道々。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
一む。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
ひそ。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
此物語の趣。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
あぢ。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
えで。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
よむ。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
下の。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
事に。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
きよ。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
み味。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
見ゆ。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心
あふ。あまへも今あくさたもみちくふ。思ふ心

をおりたりて大のさうり作りて。何つさ三寸むら
りて。一を例に女手。二くくりみひとくかき一
ハありて。おづ例の手をよまさせぬ。かかひとつ
手とり。狭衣。おのりあどかきおせぬへるをま
れを。扇。草假字。真字を。舟人のちをたえあ
ど。あへま。か。きたるを云々。源氏物語繪合巻取
る須磨の巻絵繪詞の事を以てする詞。さうの手に。か
んなのところ。く。ま。あ。た。ま。せ。て。ま。ほ。の。日。記。を。た。り
ら。び。あ。を。れ。あ。る。歌。あ。ど。も。お。し。ま。る。た。ぐ。ひ。ゆ。り。う。
た。ま。も。あ。と。く。お。ほ。さ。げ。真字を草紙手お書たる中
交へたる由あり。上お舉たる土佐日記のをこのす
ぬる日記といふものを云々とある文お考合すべし。

竹川巻。見。あ。へ。と。お。ぼ。う。て。か。あ。ぐ。ち。お。書。て。と。あ
る。ハ。薰。より。侍。従。の。も。と。へ。の。文。を。玉。葛。の。見。寄。あ。を。む
意。あ。ら。び。して。目。や。す。く。假。字。が。ち。に。も。お。し。て。よ。の。常
草。字。を。む。少。し。交。へ。ぬ。へ。る。趣。あり。初。子。巻。ふ。明。石。の
上。お。事。を。手。習。と。も。の。と。ぐ。れ。う。ち。と。け。た。る。も。す。ぢ。か
たり。ゆ。あ。あ。る。書。ざ。ま。お。り。こ。と。く。け。た。り。と。も。草。紙。ち。お。ど
も。さ。さ。あ。る。ば。め。や。す。く。書。す。さ。び。たり。と。も。云。へ。り。
柗。巻。ふ。朝。貞。の。齋。院。の。歌。書。ぬ。へ。る。さ。ま。を。さ。ご。せ。る。詞
よ。御。手。こ。ま。や。う。に。ハ。あ。ら。ね。ど。ら。う。く。し。う。さ。う。お
ど。を。う。し。う。お。り。に。と。り。と。云。へ。る。御。手。こ。ま。や。う。お
あ。ら。ね。ど。と。歌。あ。た。ぬ。へ。る。手。の。假。字。お。さ。ご。お。り。さ
う。お。ど。を。う。し。う。と。と。それ。お。書。ま。し。へ。ぬ。へ。る。よ。の。つ
ぬ。の。草。梅。枝。巻。ふ。草。紙。の。箱。ど。も。お。入。る。ほ。き。草。紙。ど。も
お。り。や。が。て。本。手。も。志。ぬ。お。ほ。き。を。え。ら。せ。ぬ。お。い。よ。し
へ。の。あ。み。あ。ぢ。は。の。御。手。ど。も。の。世。お。名。を。残。し。ぬ。ん
る。せ。ぐ。ひ。の。も。い。や。多。く。さ。ふ。ら。ぬ。よ。ろ。づ。の。事。昔。お。え

源氏物語繪合巻取

の御おくり物今朝ぞあまの御らんぢる云々手箱
ひとよろひつ方おまの御らんぢる云々手箱
草紙とも古今撰集拾遺抄その部ども五帖まつ
つりは侍従の中納言と延轉とおのへ草紙と
つよ四貫を充てつ書せぬへり云々あけこの上よ
入まるとり下るハ能宣元輔やうのいへ今歌よ
みどもの家々お集あききり延轉と近澄のきみと書
たるハさるものゝてこれハきり延轉と近澄のきみと書
をせよふべきみことらぬものどもに志おさせぬ
今めうしうさぬことなりともいなり其納言を行
成卿ありされバ行成卿とさうあり延轉法師近澄ぬ
しぬどもをゆるきハあく今免う延轉法師近澄ぬ
そありぬむ女手を心おいてぬらむさかりお
こともぬき手本多くつどへたりし中に中宮は
御息所心おのびずはしりうがいぬりし一り
ばうり。はり幕木巻る見えうり下に引く書ぬわさと

形らぬをえておことにおほえしはや云々宮御
手をおまやうにをうしけあまどかどやねくれたら
んとうちさく免きてきあえぬ故入道の宮御御手
を。心電々しぬふうりぬま免ぬるすぢハあましり
どよまきとあろ有て。まほえぬそすくありし院の内
侍ののみこそ。今お世の上手おをねまきと。ああり
そほまてくせぞそぬ免る。さハありともかのきと
と。前の齋院と。あ。お。紫上を。とこそはかきぬを免と
許しぬとえぬ。此數るおおはやくやとぬとえぬ
まへを。紫上の詞件の二人お立ちあらぬ
書む事のちづかしたとぬり。いせうぬすく

○假字本末と卷之上

○四五

源詞ホコリカチナシト意

しむひそ紫の手にあやり形るかと形つるさハこと形
形ものを假字を柔和と書たるを見まむ其人がらの
形おんあのほくみたるほとにおん形ハ志とけた形
もじこそましる免まとて漢字形りあ真字もてたるの
書ざまハ善くありぬへりそれハ合せてハ假字ハ志
どけあきがましる免ま心をいれて能く書ぬへと心
をそへぬ書得る事の難きものぞといふる意のあ
よりもよく書得る事の難きものぞといふる意のあ
きこゆ云々例の寢殿ふちあましまして書ぬふ
云々御心のゆかぎりさうのもたるのも女手を以
みしうかきつくしぬふ草字をも假字をも殊ハ云々
兵部卿宮あらりぬふと形あゆれむ云々かの御さう

し持せて日らりぬへる形りぬ里やりて御らんすま
を兵部卿をすくれてしも有らぬ御手をたるかとあどに幕木
かどくくくけくたるちぬまを以て書つく筆すま
云々とあり其文下に引く書し筆すみたるとハ古
たるらし形ありて書ぬしぬふ書し注ああらのぬけた
る形りとあり下形左衛門督の手歌もあとさら免まき
形論の詞ハ合せさとるべし歌もあとさら免まき
そをみたるふることもをえりてたる三くさまは
かりぬもしほくぬふ真字ほくぬふあのましく
ぞあらぬへ書たと御らんしおとろきぬあらまて
ハ思ひぬへほくそ有まつまらに筆ぬげもすつ書
しやとぬこらりぬふ云々源手さうにかきぬへるまぐれ

て先ぞたしと見^黄ふふ云々。おほ^{是源手}どろねる女手のう
ふはしう心とく先ておたむする。上^{きり}御心のゆたあ
のふとあるよ。照應して心得^したふ^たと^ふ清き^あと^無
し。み^あふ^人泣^涙さへ。ま^けく^たま^あが^れそ^ふあ^くち
して。あ^く世^{ある}海^たた^ふ。又云々。み^どま^たる^さうの
歌を。筆におおせてま^どれ^かき^あへ^るさ^ぬ。み^どま^たる^さう
あ^きり^取し。^まど^まと^るさ^うの^歌を^云々^ハ。真^假字^を
極^草みて^歌を^みと^れ書^ふも^のし^あへ^る
なり。云々。左衛門督^たは^こと^くく^う。か^しこ^けね^る
ま^ちを^あの^みて^書た^まと^筆の^おき^てす^まぬ^こく^ち
して。い^とち^りく^をへ^たる^けし^たあ^ま。上^小兵^部卿^の
御^手事^をい

きう筆すみきるけしき何りて書ねしあへま。とある
を。あ^く先^筆の^おき^てす^まぬ^こく^ちて^云々^とあ^る
ふ。合^せて^云々。あ^ふハ^まと^手事^ども^のき^まひ^くら
心得^し。云々。あ^ふハ^まと^手事^ども^のき^まひ^くら
して。ま^まく^先清^ぎ紙^本ど^も古^き卷^もの^えり^出
させ^あへ^るつ^いで^ふ。云々。此^比ハ^たぐ^あん^あの^さど
免^をし^あひ^て。世^{の中}手^かく^とお^ほえ^る上^中下
先^人々^ふ。さ^る清^きも^のど^もお^ほし^はう^らひ^て。と^ば
ね^てか^くせ^あふ。此^處先^文の^あも^のの^書ぎ^ま。手^のあ
せる^もの^形り。此^おろ^ハき^ぐあ^んあ^のさ^どめ^をし^た
ま^ひて^とか^らる^をも^思ふ^べし。さ^て梅^枝卷^の此^段先
文^をむ^源氏^君の^假字^がき^の同^篇木^卷。手^を書^たる
ま^もふ^り先^事ハ^あく^て。あ^くか^しあ^のて^んね^がよ^は

しるべき。そこはうとわく々しむるを。うちみる
まかどくくく。けしむる。紫式部日記。和
あそおもろうあきかちしむる。されど和泉ハけし
あらぬうこそあれ。打とけてふみちりあきとる
い。そのかきのさえある人。えう。あほおとのすぢ
を。こまやう。小書得たるを。梅枝。卷。宮の御手。あま
ど。やあくれたらむ。神。卷。御手。あまやう。げあまど。か
ど。らう。く。う。草。あどを。う。う。あり。みきり。と見え
の。詞。上。も。引。き。れ。ど。あ。く。う。ま。べ。の。筆。あ。え。て。み。ゆ。き
ど。今。む。と。た。び。ど。り。あ。ら。べ。て。見。れ。む。あ。お。ち。實。あ。ま
あ。む。より。う。る。此文をも。前の假字さ。ど。同。神。卷。源。氏
君の。紫。上。あ。事。を。の。ま。へ。る。詞。御。手。は。いと。を。う。し

うのみなりあさるもの。あ。と。ひとり。ご。ち。て。う。つ。く
し。み。ほ。く。あ。ま。あ。常。ふ。か。き。う。は。し。め。ん。た。源。氏。御。手
ま。い。と。よ。く。似。て。い。ま。は。あ。し。あ。ま。あ。う。う。女。し。た。と
あ。ろ。か。き。そ。へ。あ。事。あ。あ。い。くら。も。あ。り。ぬ。べ。り。き。せ。
こと。さら。に。え。も。と。免。も。出。は。因。云。子。續。世。繼。藤。波。中
白。忠。通。公。の。事。を。申。せ。る。下。手。か。せ。ぬ。事。ハ。む。う
し。あ。の。も。く。い。ま。免。う。あ。ち。し。あ。り。真。字。も。假。字。も
あ。の。を。さ。ら。に。内。裏。の。額。ど。も。ふ。る。き。を。バ。う。し。う。せ
た。る。を。御。所。あ。ど。の。色。紙。形。ハ。い。う。ば。あ。り。か。た。多。く。か
の。御。堂。御。所。あ。ど。の。色。紙。形。ハ。い。う。ば。あ。り。か。た。多。く。か
か。せ。た。あ。む。き。云。々。又。水。く。た。の。卷。あ。宰。相。中。將。教。長。朝
臣。あ。の。額。あ。ど。も。書。き。ま。あ。り。又。御。堂。あ。色。紙。あ。り

○假字本末上卷之上

○天

も安覺が事を詳し其一人鶴林玉露も載りたりと
のふ羅大經り著せる文を其載り其文云余少年時於
世ふ羅大經り著せる文を其載り其文云余少年時於
陵選進日本一僧名安覺自言離其國已十年欲盡記
部藏經乃歸念誦甚苦不舎晝夜每有遺忘則叩頭佛前
祈佛陰相是時記藏經一如此朱文公云今世學教之徒其
立志堅苦不退轉至於經語孟不文公云今世學教之徒其
行數墨備禮應數六僧始有愧色云々得三五板而望有
成亦已難矣其視此僧始有愧色云々得三五板而望有
林色異稱曰本傳此僧始有愧色云々得三五板而望有
朝之後止筑前國田嶋香正寺汲彦高根神泉嘗入宋歸
硯水猶存云寫一切經兼元羊十乘燭談其功筆畫楷
正今香存牛山翁對談二帝喜捨當時源平其諸將
頃又今存牛山翁對談二帝喜捨當時源平其諸將
至手今存牛山翁對談二帝喜捨當時源平其諸將
名各其姓或ハ一帝ハ二帝を喜捨當時源平其諸將
み世間其姓或ハ一帝ハ二帝を喜捨當時源平其諸將
志慨甚ありか事切りてみる人の精神云へりま

ふと燃る人なり分て其一切經虫食腐壞ありと
るがうへおのれ前より得て障子をおのすさび見そ
さくろあるよき志を考ての障子をおのすさび見そ
のきもつよき志を考ての障子をおのすさび見そ
書をへきつよき志を考ての障子をおのすさび見そ
まを大假字といふり著聞集假字を武が事馬馳
る下大假字といふり著聞集假字を武が事馬馳
たる證人候たる條いふり著聞集假字を武が事馬馳
が事をいへる條いふり著聞集假字を武が事馬馳
を申すけりぬと見えさる事ありとた大が物語木綿幣巻
を宮すけりぬと見えさる事ありとた大が物語木綿幣巻
返りことぬと見えさる事ありとた大が物語木綿幣巻
心集を賜へあらしむる書を付むと云ふすところと
筆とを賜へあらしむる書を付むと云ふすところと
きれむ手もぬと見えさる事ありとた大が物語木綿幣巻
るたたが物語國禪卷を日ろ窪く手取蓋を云へる手
云々とあるも假字を日ろ窪く手取蓋を云へる手

○假字本末上卷之上

○平正

て中昔草假字を和字と云ふ事
久州以五十箇條修佛事と
武正安元幸感又祇園相副和字諷誦文貞元年
もあるこれあり又祇園相副和字諷誦文貞元年
おの下の状も元幸感又祇園相副和字諷誦文貞元年
以和字換漢字とを注せり其本
假字換漢字とを注せり其本
つらぬる由とを注せり其本
おみねも和字をいへり其本
將軍令好和字給云々あり其本
お軍令好和字給云々あり其本



